

序文

防衛研究所（以下「NIDS」という。）及びドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所（以下「ZMSBw」という。）は、それぞれ両国の防衛省及び国防省に属し、研究、教育及び公文書（史料）管理において、重要な役割を果たしてきた。

NIDSとZMSBwは、2019～2021年に、20世紀の戦争の歴史に関する共同研究を行った。2019年にはそれぞれ東京とポツダムで2回のワークショップを、その後、新型コロナウイルス感染症の影響により、2021年にはオンライン形式でワークショップを開催した。

この論稿集は、これらのワークショップで発表されたものを成果として取りまとめたものである。

地理的な距離にもかかわらず、日本とドイツには似通った歴史的経験がある。両国共に19世紀後半に国民国家として存在感を増し、緊密な軍事的関係を結んだ。20世紀には、第一次世界大戦で敵対関係にあったものの、日本軍はドイツ軍の経験を自らの組織に積極的に取り入れようと努めた。第二次世界大戦に至る過程では、日独いずれも国内の社会不安とソ連の台頭に直面した。加えて、戦略的役割に関する自己定義を見直し、NATOで多国籍軍の結成を試みたドイツの冷戦後の経験は、現在、戦略的環境の劇的な変化に直面している日本に有益なヒントを与えてくれるかもしれない。

興味深いことに、本報告書の論稿からは研究様式の違いが明らかになった。ZMSBwの研究者が軍と社会を関連付けて社会歴史的な側面の把握を試みる一方、NIDSの研究者は、戦争の歴史の詳細な探求に重点を置いている。こうした異なる視点と手法の交錯は刺激的であり、今後の研究のきっかけになるであろう。

ここ数年の感染症のパンデミックにもかかわらず、共同研究を実施し、英語版と日本語版を刊行できたことは非常に喜ばしいことである。この研究が、過去の探求への新たな視点のみならず、現代の戦略的課題を理解する上で有益な基盤をも提供できるよう願っている。

防衛研究所戦史研究センター長
石津 朋之